

弥生時代墓制の変遷
－房総地方の発掘調査成果から－

加 藤 修 司

目 次

1	はじめに	379
2	弥生時代中期前葉～中葉の墓制	379
	（1）再葬墓の分布と方形周溝墓の出現	379
	（2）再葬墓的葬法の継続	381
	（3）土壙墓（土器棺）に見る再葬墓の伝統	382
3	弥生時代中期中葉～後葉の墓制	384
	（1）盛土を持つ方形周溝墓の集団墓地の形成	384
	（2）周溝内埋葬の頻度と性格	385
4	弥生時代後期の墓制	386
	（1）方形周溝墓の変容（上総地域）と消滅（下総地域）.....	386
	（2）土壙墓から見た弥生時代後期墓制の地域差	390
5	弥生時代終末期（古墳時代出現期）の墓制	393
	（1）方形周溝墓と古墳の区分基準	393
	（2）下総地域での方墳の出現	394
	（3）集落との近接と隔絶	395
	（4）外来形土器と特異な副葬品	395
6	まとめ	396
7	おわりに	397

1 はじめに

房総地方における弥生時代墓制については、これまで多くの研究が行われてきた。「再葬墓」「方形周溝墓」「土壙墓」「副葬品」等の個別研究をはじめ、小地域的な集成や統計分析もなされてきた。しかし、再葬墓と方形周溝墓の関係、方形周溝墓形態の多様化、盛土の有無、土壙墓との関係、さらに方形周溝墓と方墳との区別など、漠然とした共通理解があるものの不明瞭で曖昧な解釈が多い。本稿では当財団の50年に及ぶ発掘調査成果を再度掘り起こし、他の調査機関の成果も合わせて、関連する重要データを時期ごとに再整理していく。

2 弥生時代中期前葉～中葉⁽¹⁾の墓制

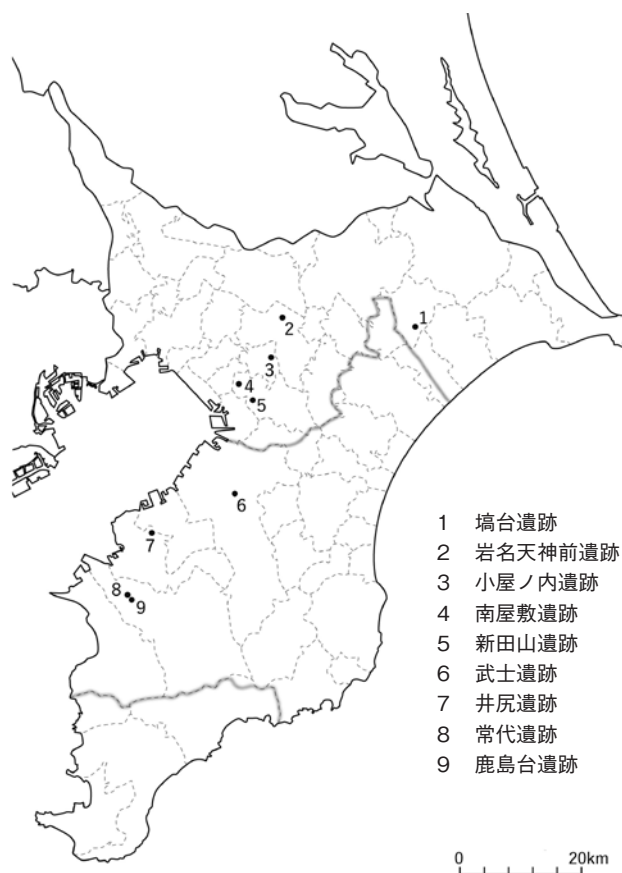
(1) 再葬墓の分布と方形周溝墓の出現

県内の再葬墓について、下総地域では学史的に著名な岩名天神前遺跡（佐倉市）や64基も検出されて県指定有形文化財となった埴台遺跡（多古町）などがある。上総地域においても下総地域同様の出流原式の系譜に加え、武士遺跡（市原市）では平沢式などの異系統の影響が認められており、再葬墓という墓制は弥生中期前葉～中葉にかけては、汎半島的に定着していたと言えよう。

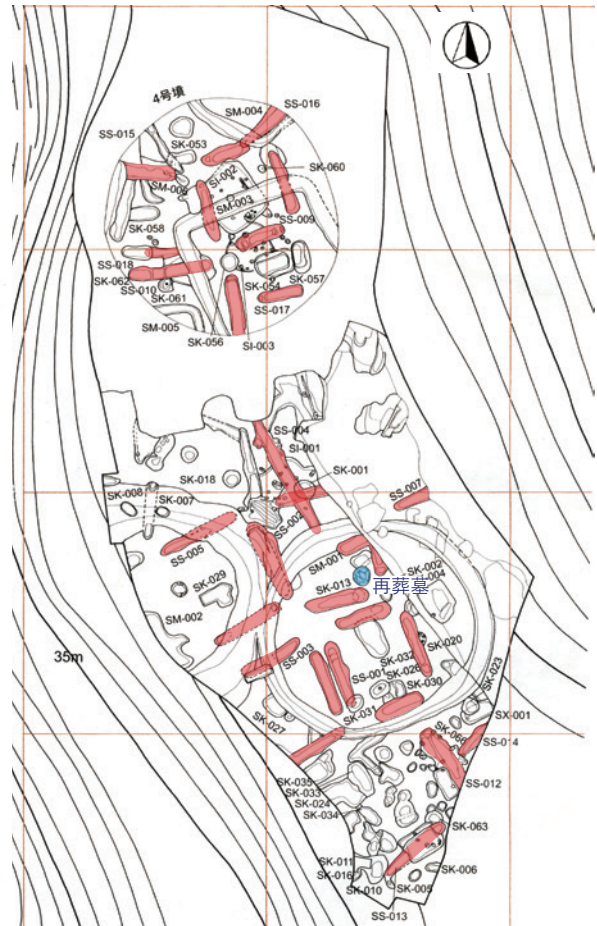
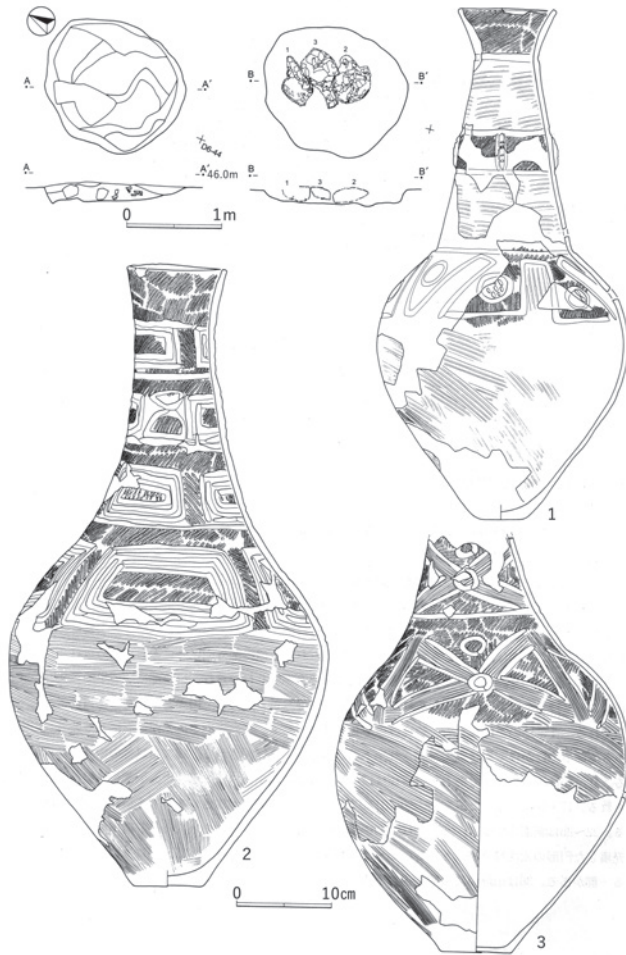
当財団が平成12（2000）年から発掘調査を行った鹿島台遺跡でも再葬墓が検出されている（第2図）。時期的には出流原式期の古段階と報告されているが⁽²⁾同型式の細長頸の壺を出土した方形周溝墓が西上総地域の常代遺跡でも検出されている（第3図）。また、袖ヶ浦市向神納里遺跡の方形周溝墓でも頸部から上を欠いた細長頸壺と蓋と思われる鉢が伴出し、合口壺棺の状態を呈している（第4図）。

常代遺跡、向神納里遺跡の方形周溝墓では、周溝中央部を避けて土坑状の窪みを掘り、細長頸壺を置いている。すなわち在地で定着していた再葬墓の伝統が、方形周溝墓という外来的で新たな葬法においても引き継がれていたことになる。しかし、出土した壺は1～2個体と想定され、再葬墓とは異なり少数である。

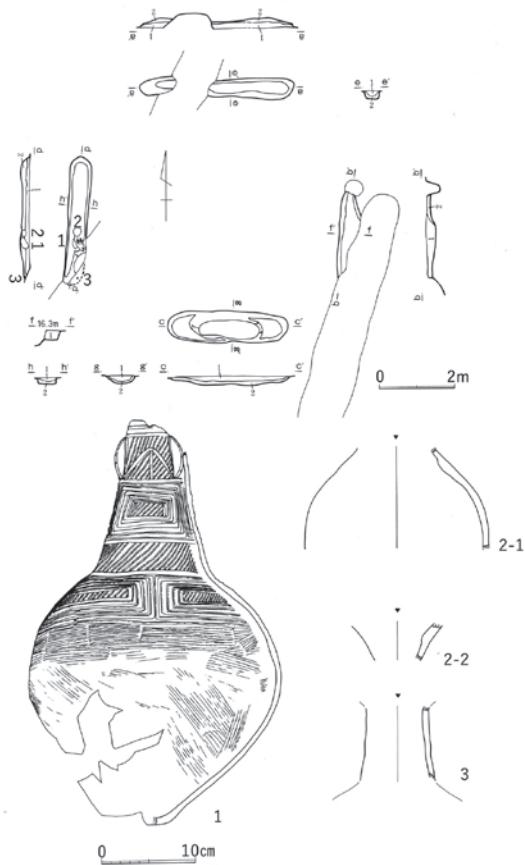
再葬墓と方形周溝墓は同時に存在していたのであろうか。第2図を見る限り、方形周溝墓は再葬墓を無視するかのように後時代に構築されているようであり、同時存在は考えにくい。しかし、図示していないが常代遺跡や木更津市井尻遺跡では両者は離れて確認されており、共存していた可能性もある。いずれにしても房総地方で初めて方形周溝墓が出現したのは、海ルートにおいて東海地方に最も近い西上総地域であり、その形態は、例外なく中央主体部の四方を溝で囲む企画性の強い「四隅陸橋形」であった。



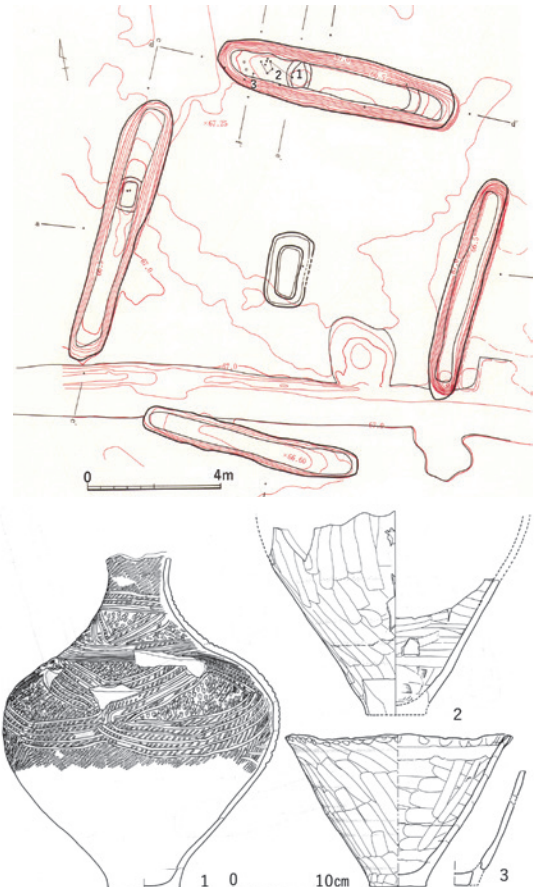
第1図 再葬墓を含む主な遺跡



第2図 鹿島台遺跡 再葬墓SK013と方形周溝墓群



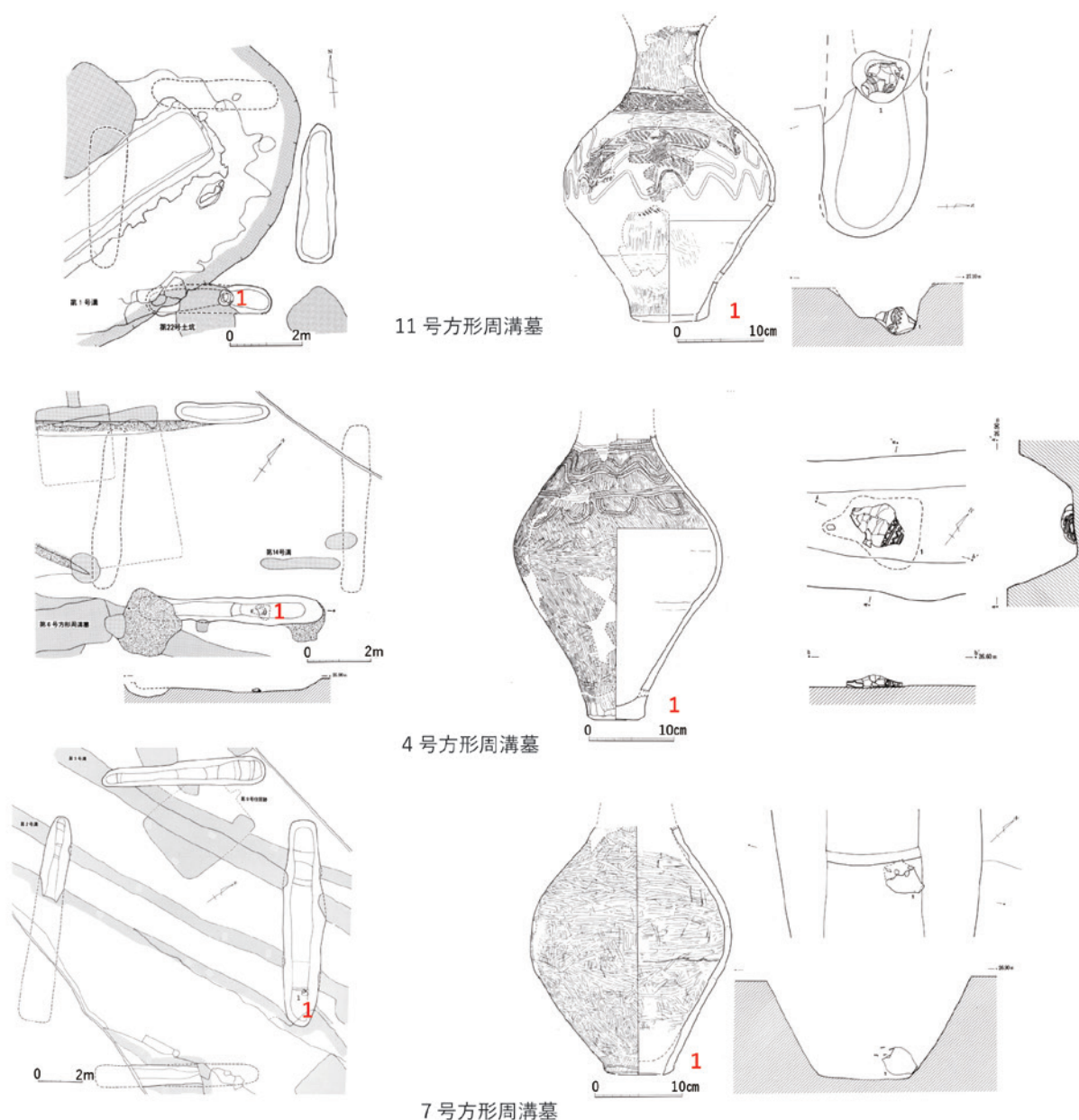
第3図 常代遺跡 初期の方形周溝墓SZ61



第4図 向神納里遺跡 初期の方形周溝墓SE061

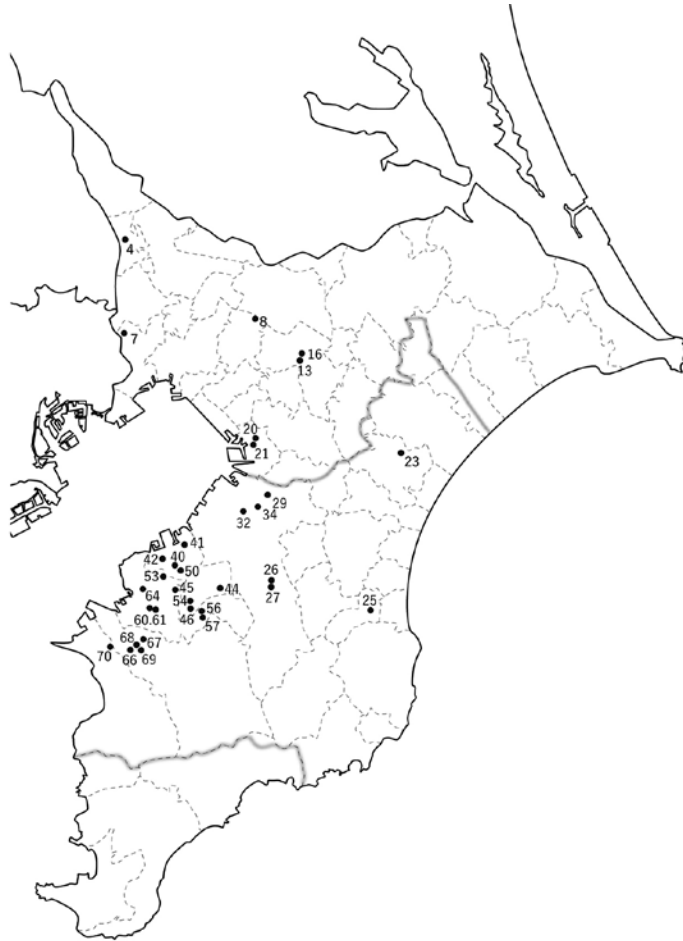
(2) 再葬墓的葬法の継続

再葬墓の変遷については石川日出志氏が既に論じているが⁽³⁾、再葬墓の伝統を周溝に残す方形周溝墓は、いつごろまで続いたのであろうか。石川氏も指摘されている周溝端部底面を掘り込み、壺を置くという埋葬例は、木更津市山王台遺跡でも確認されている。いずれも頸から上を欠いており合口壺棺で単独出土である。土器型式は初期の方形周溝墓（3・4図）よりも一段階新しい弥生中期中葉である。そしてこの時期には周辺遺跡を含め、再葬墓は検出されていない。すなわち、西上総地域では弥生中期前葉～中葉の間に「再葬墓→再葬墓+方形周溝墓→方形周溝墓」の変遷が想定されるのである。



第5図 山王台遺跡 再葬墓の伝統を残す方形周溝墓

一方、下総地域では再葬墓は定着したものの、初期の方形周溝墓は上総地域北東部も含め、検出されていない。第1表に見るよう、その出現は概ね中期後葉（後半）の段階と考えられ、大崎台遺跡と寺崎向原遺跡のように、突発的に大規模な集落とその墓域である方形周溝墓群が出現していることが大きな特徴である。四隅陸橋形が群として形成され、共同墓地の性格が強調され定着していた。



第6図 弥生中期方形周溝墓を含む主な遺跡

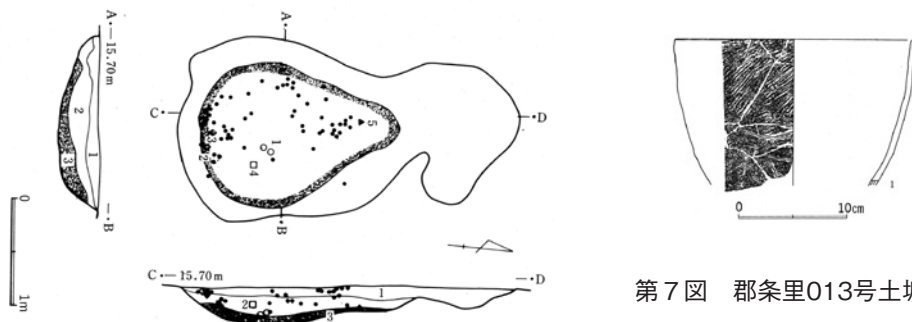
第1表 弥生中期方形周溝墓の出現期間

地域	No.	遺跡名	市町村名	弥生時代		
				中期		
				前葉	中葉	後葉
下総地域	4	下花輪荒井前遺跡	流山市			△
	7	国府台遺跡	市川市			△
	8	栗谷遺跡	八千代市			△
	13	寺崎向原遺跡	佐倉市			△
	16	大崎台遺跡	佐倉市			△
	20	星久喜遺跡	千葉市			△
	21	中野台遺跡	千葉市			△
上総地域	23	道庭遺跡	東金市			△
	25	上之郷下町裏遺跡	睦沢町			△
	26	南総中学校遺跡	市原市		△	△
	27	江子田遺跡	市原市		△	
	29	中潤ヶ広遺跡	市原市			△
	32	諏訪台遺跡	市原市		△	△
	40	根形台遺跡	袖ヶ浦市			△
	41	美生遺跡群	袖ヶ浦市			△
	42	谷ノ台遺跡	袖ヶ浦市		△	△ □
	44	荒久遺跡	袖ヶ浦市			△
	45	滝ノ口向台遺跡	袖ヶ浦市		△	△
	46	向神納里遺跡	袖ヶ浦市	△	△	△
	50	境遺跡	袖ヶ浦市		△	△
	53	井尻遺跡	木更津市	△	△	△
	54	中台A遺跡	木更津市			△
	56	根岸小妻遺跡	木更津市		△	△
	57	山王台遺跡	木更津市	△	△	
	60	野焼A遺跡	木更津市			△
	61	野焼B遺跡	木更津市			△
	66	郡条里遺跡	君津市			△ □
67	畑沢遺跡	君津市			△	
68	常代遺跡	君津市	△	△	△	
69	鹿島台遺跡	君津市		△	△	
70	前三舟台遺跡	富津市			△	

△四隅陸橋形 □一隅等陸橋形（複数形態有）

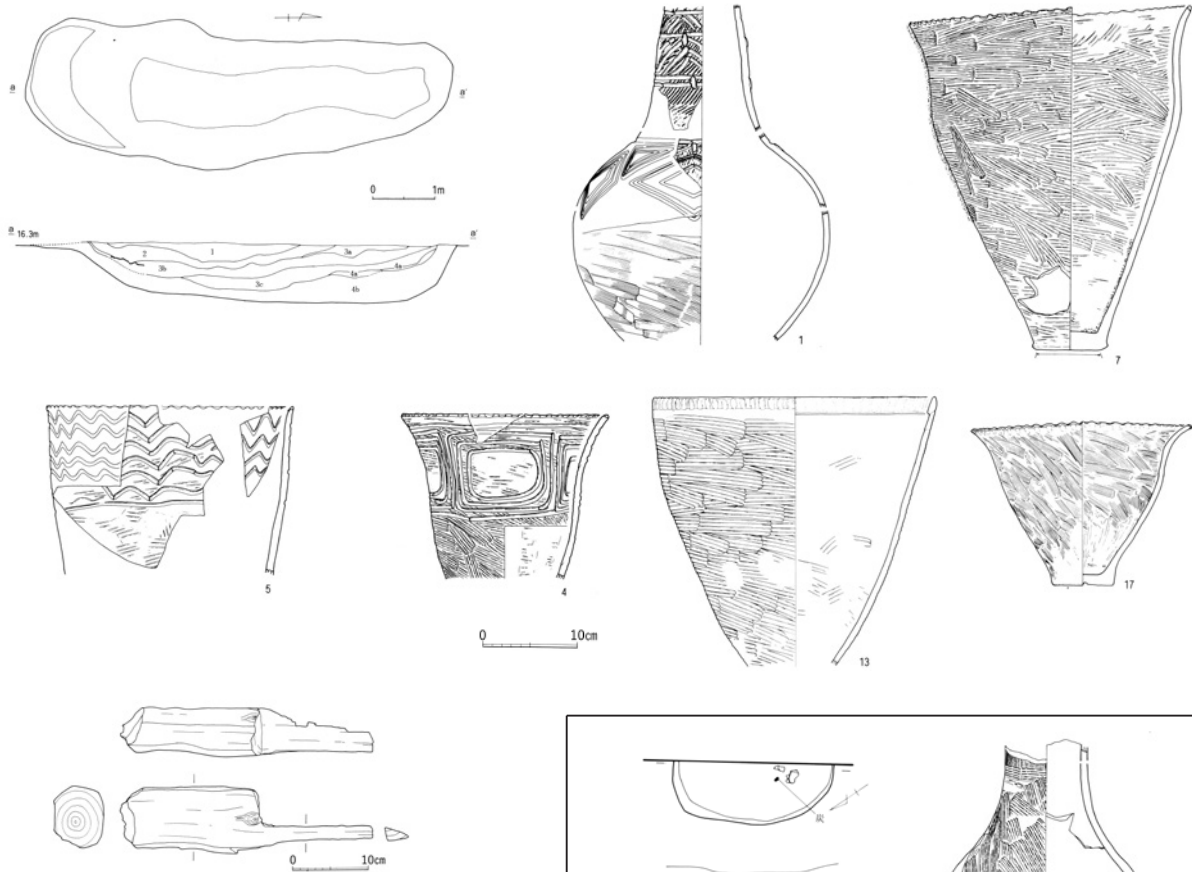
(3) 土壌墓（土器棺）に見る再葬墓の伝統

西上総地域では、君津市郡条里遺跡に弥生中期前葉～中葉の東海地方の条痕文系譜の土器が出土した土壌墓が検出された。土壌内には炭化材を含む黒色粘土層が敷きつめられていた（第7図）。土器は再葬墓とは明らかに異なる器種であり、炭化材も何を意味するのか不明であるが、土壌内で焼成行為が行われた可能性がある。



第7図 郡条里013号土壌墓

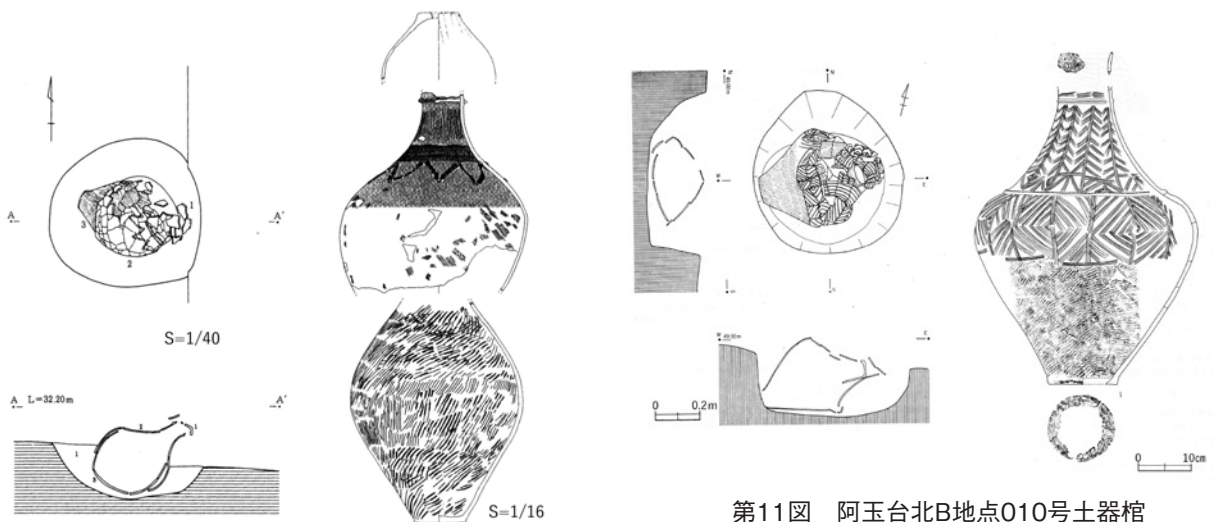
さらに隣接する常代遺跡でも多数の土壌墓が検出されているが、注目すべき内容として長楕円形の土壌墓には炭化材や木材を含み、多数の甕、鉢が出土し（第8図）、円形気味の土壌墓には細長頸壺が単独で出土していることである（第9図）。報告者の甲斐博幸氏は「長楕円形土壌や不整形土壌は第1次埋葬の土壌墓であり、円形土壌は骨の一部を入れた2次埋葬の再葬墓の可能性」を指摘している⁽⁴⁾。再葬墓の周囲に甕形を主体とした細長頸壺以外の土器が存在することはかつて筆者も指摘したが⁽⁵⁾、第1次埋葬の際に火が用いられ、その際に何らかの理由で甕の使用があったと考えたい。



第8図 常代遺跡SK463土墳墓

第9図 常代遺跡SK479土墳墓

下総地域においては再葬墓の伝統を引き継いだ土墳墓（土器棺）が、弥生時代中期後半期まで続く。第10図の土墳墓は2個体の壺と、1個の蓋が重なって出土している土器棺である。第11図も頸部が欠けており、蓋を有する土器棺であろう。西上総地域では弥生中期中葉に方形周溝墓が出現するが、下総地域ではこうした土器棺だけがしばらく続き、方形周溝墓はやや遅れて波及する。しかし、南羽鳥タダメキ第2遺跡では、方形周溝墓よりも土器棺の圧倒的な優先が指摘されており⁽⁶⁾ 当地域の特徴が示されていると言えよう。

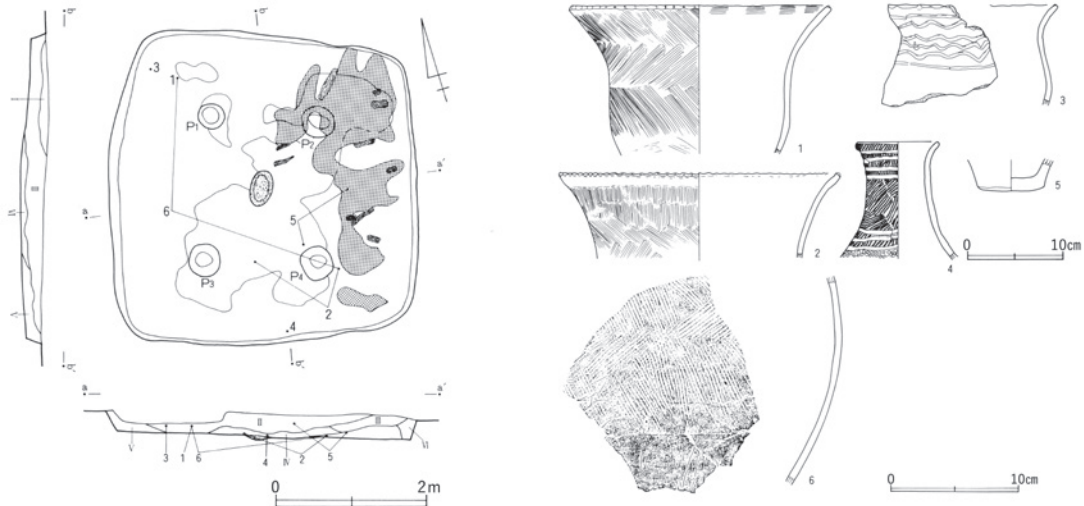


第10図 成田市南羽鳥タダメキ第2遺跡 5号土器棺墓

第11図 阿玉台北B地点010号土器棺

〈参考〉 確認されない集落跡

房総地方で最も困難な発掘の一つと言えるのが、弥生時代中期前葉～中葉の居住跡の検出である。もともと再葬墓自体も少ないため、人口の急減期であった可能性がある。また、初期農耕文化の在り方が定住を促さないものであったとも想定される。しかし、中期中葉の段階になると周辺では、神奈川県中里遺跡に見られるよう大規模な集落が出現している。一方、房総地方では常代遺跡であっても集落跡は確認されていない。筆者の知る限り、唯一とも言える居住跡は袖ヶ浦市筑田遺跡のSI001だけである（第12図）。

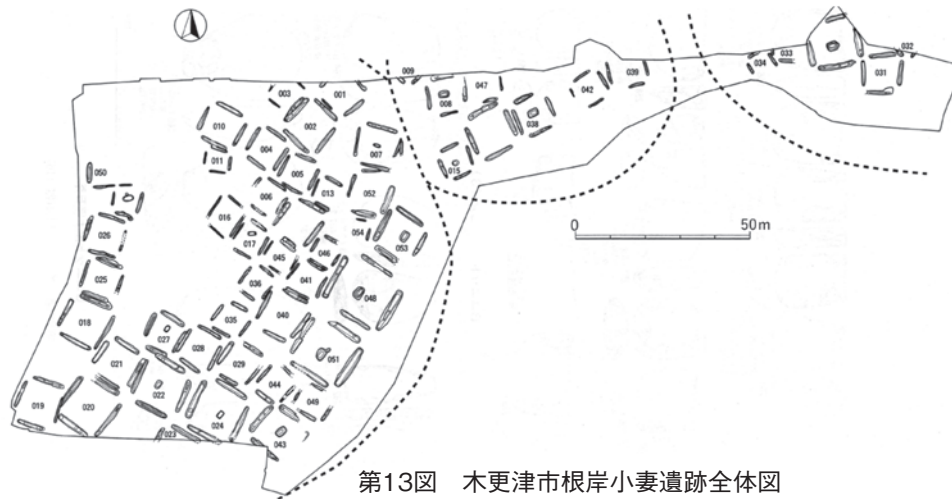


第12図 弥生中期中葉の竪穴住居跡 袖ヶ浦市筑田遺跡SI001号

3 弥生時代中期中葉～後葉の墓制

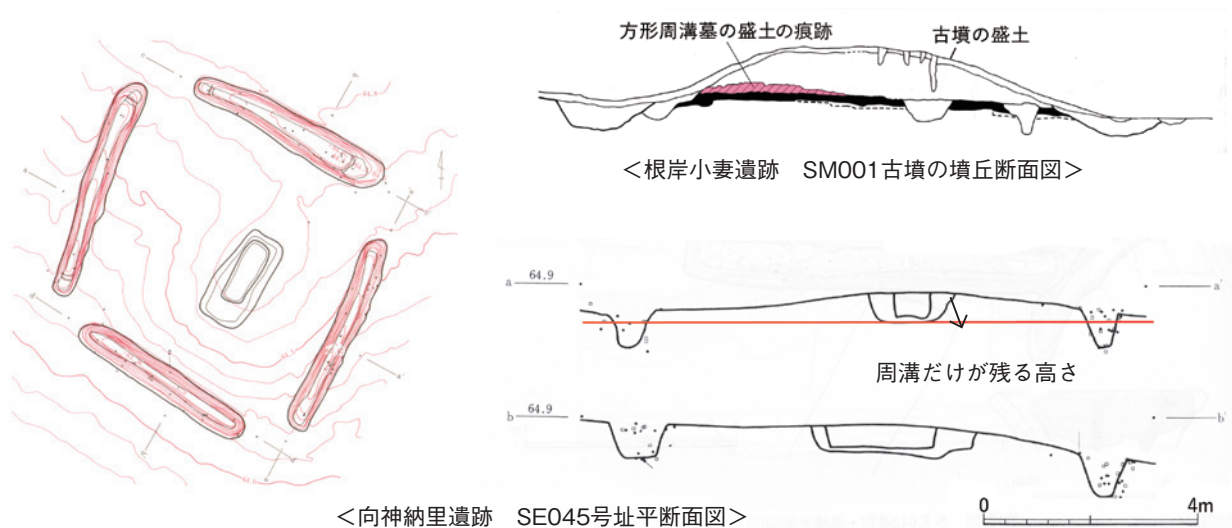
(1) 盛土を持つ方形周溝墓の集団墓地の形成

弥生時代中期中葉～後葉にかけて、上総、下総地域問わず大規模な方形周溝墓群が集団墓地として形成されていることは周知の事実である。佐倉市寺崎向原遺跡の他、本財団で発掘調査を行った木更津市根岸小妻遺跡でも第13図のような群が形成されていた。群は3か所に分かれているが、お互い近接してつくられており重複関係もほとんど無い。被葬者同士の密接な集団関係を示唆していると言えよう。



第13図 木更津市根岸小妻遺跡全体図

一方、第13図を見ると方形周溝墓群において中央主体部の有無にバラつきがあることが分かる。その要因の一つは「盛土」の消滅である。方形周溝墓には当初から盛土があったことは間違いない。根岸小妻遺跡では一部の方形周溝墓の真上に古墳が築かれており、その土層断面には方形周溝墓の盛土の跡が確認されている。袖ヶ浦市向神納里遺跡では、僅かであるが実際の盛土が確認されている（第14図）。



第14図 方形周溝墓の主体部と盛土の関係

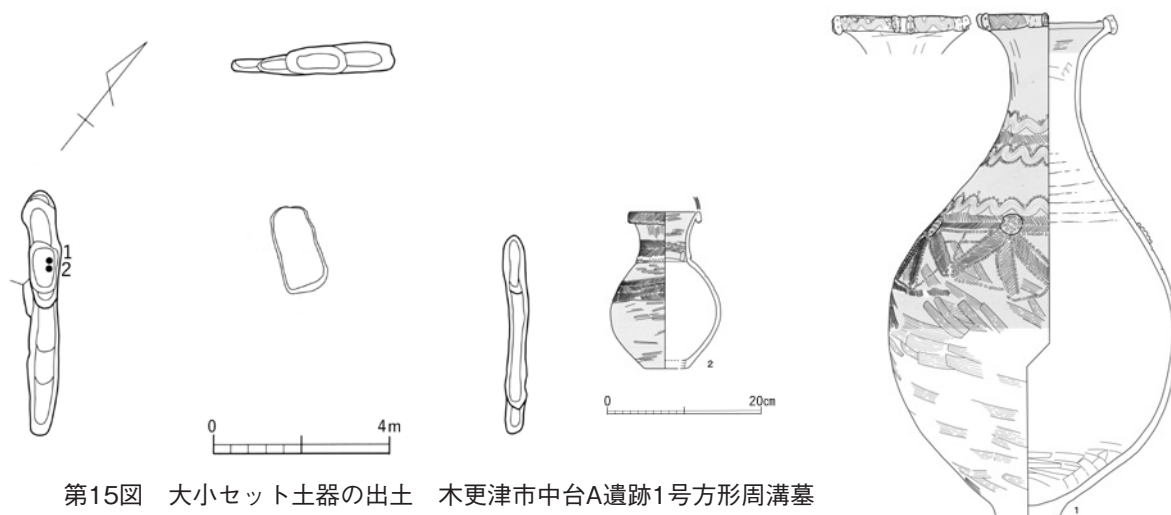
発掘調査において、遺構確認面が第17図の赤線の高さであると、当然中央主体部は消滅してしまう。

下総地域の寺崎向原遺跡でも、中央主体部が検出されない方形周溝墓について「方台部のローム面上に主体部が位置していた」という指摘がなされている⁽⁷⁾。

(2) 周溝内埋葬の頻度と性格

袖ヶ浦市向神納里遺跡では、弥生中期方形周溝墓の多くが盛土を有していたことから、本来的な構造に近いと考え統計処理を実施した。報告書掲載総数44基（攪乱等の多い遺構を除く）のうち43基（98%）が四隅陸橋形であり、中央主体部検出は32基（73%）、周溝内に土器が集中するもの（周溝内埋葬の可能性）は12基（27%）、内土器棺と確定できる壺・蓋セットが出土したのは4基であった。重要な視点は周溝から土器棺が出土した方形周溝墓には、いずれも中央主体部も存在していたことである。すなわち、中央主体部被葬者に対する「追葬」としての性格が強調されている。周溝内埋葬は弥生中期の古い段階より続いており、頻度は少ないものの（土器棺として）追葬が許される背景には、集団墓地の規制が緩やかなものであったと考える。また、弥生中期末葉になると周溝内埋葬で注目すべき例も確認されている。

木更津市中台A遺跡の方形周溝墓では、中央主体部が検出された一方で周溝内にも埋葬施設と考えられる土坑が検出された（第15図）。そこに大小の同型式の完形土器セットが置かれていた。中央主体部を有することから追葬と考えられ、同型式の土器セットから「親子埋葬」の仮説も想定できる。但し、壺の頸



第15図 大小セット土器の出土 木更津市中台A遺跡1号方形周溝墓

部が欠けていないことから、中央主体部の被葬者への供献品であった可能性も否定できない。

いずれにしても、弥生中期の方形周溝墓は当初から盛土と中央に主体部を有し、集団墓地としての画一的な性格を持ちつつ、周溝内での追葬もしくは祭祀行為が一部で定着していた可能性がある。なお、周溝内埋葬については、明確な土坑等の検出例が少なく、土器だけ周溝内の一カ所に集中して出土するなど、微妙な状況が多い。土井翔平氏は、埋葬施設としての設定条件の厳格化を提唱されている⁽⁸⁾。

4 弥生時代後期の墓制

(1) 方形周溝墓の変容（上総地域）と消滅（下総地域）

弥生後期になると第2表に見るよう、方形周溝墓は上総地域では四隅陸橋形から一隅陸橋形等に平面形態が多様化してくる。中には方墳と同様に全周形も出現するが、これらの変化は漸移的である。市原市諏訪台遺跡ではそうした変化を具体的に見ることができる（第17図）。

第2表 弥生中期～古墳前期の方形周溝墓の出現期間※※

※※各時期に連続して△が記載されていたとしても、墓が必ずしも継続的に築造されていたというわけではない。
当該時期に1基でも該当する墓があれば印をつけている。

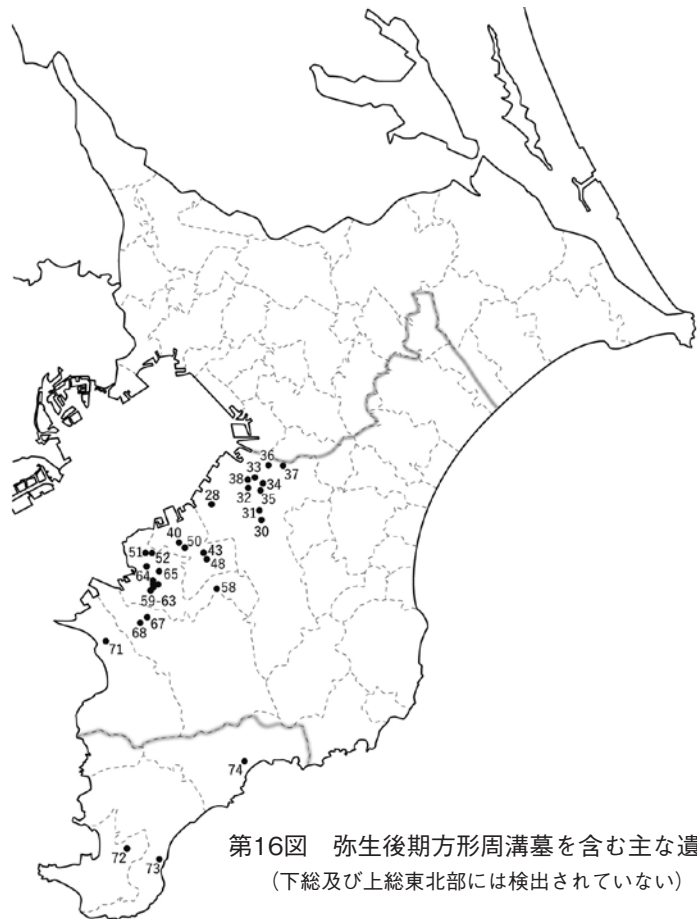
地域	No.	遺跡名	市町村名	弥生時代							古墳時代			
				中期			後期				前期			
				前葉	中葉	後葉	前葉	中葉	後葉	※	前葉	中葉	後葉	
下 総 地 域	1	上三ヶ尾宮前遺跡	野田市									□	■	
	2	戸張一番割遺跡	柏市									■		
	3	石揚遺跡	柏市									■		
	4	下花輪荒井前遺跡	流山市			△								
	5	富山遺跡	松戸市									■		
	6	溜ノ上遺跡	松戸市									■		
	7	国府台遺跡	市川市			△						□		
	8	栗谷遺跡	八千代市			△						■		
	9	権現後遺跡	八千代市									□	■	
	10	ヲサル山遺跡	八千代市									■		
	11	井戸向遺跡	八千代市									■		
	12	飯郷作遺跡	佐倉市									■		
	13	寺崎向原遺跡	佐倉市			△						■		
	14	臼井南遺跡	佐倉市									■		
	15	江原台遺跡	佐倉市									■		
	16	大崎台遺跡	佐倉市			△						■		
	17	酒直遺跡	栄町									■	■	
	18	館山遺跡	神崎町									□		
	19	阿玉台北遺跡	香取市									●		
上 総 地 域	20	星久喜遺跡	千葉市			△						□	■	
	21	中野台遺跡	千葉市			△						■		
	22	北野遺跡	山武市									■		
	23	道庭遺跡	東金市			△								
	24	国府関遺跡	茂原市									△	■	
	25	上之郷下町裏遺跡	睦沢町			△								
	26	南総中学校遺跡	市原市			△	△							
	27	江子田遺跡	市原市			△								
	28	六孫王原遺跡	市原市						△	△		●		
	29	中潤ヶ広遺跡	市原市			△								
	30	北旭台遺跡	市原市							□				
	31	武士遺跡	市原市							□				
	32	諏訪台遺跡	市原市		△	△	△	□	■	□	■			
	33	御林跡遺跡	市原市						△	□				
	34	山田橋遺跡群	市原市						△					
	35	小田部新地遺跡	市原市						△					
	36	大厩遺跡	市原市							■				
	37	草刈遺跡群	市原市						△	△				
	38	長平台遺跡	市原市							□	■	■		
上 総 地 域	39	上大城遺跡	袖ヶ浦市									□	■	
	40	根形台遺跡	袖ヶ浦市						△	△	□	□	■	
	41	美生遺跡群	袖ヶ浦市							△				
	42	谷ノ台遺跡	袖ヶ浦市						△	△				
	43	文脇遺跡	袖ヶ浦市								□	□	■	
	44	荒久遺跡	袖ヶ浦市							△				
	45	滝ノ口向台遺跡	袖ヶ浦市						△	△				
	46	向神納里遺跡	袖ヶ浦市		△	△	△						□	
	47	神田遺跡	袖ヶ浦市										■	
	48	清水井遺跡	袖ヶ浦市								△	□	■	
	49	雷塚遺跡	袖ヶ浦市										□	
	50	境遺跡	袖ヶ浦市			△	△	□	□					
	51	水深遺跡	木更津市									■	■	
	52	高砂遺跡	木更津市									□	■	
	上 総 地 域	53	井尻遺跡	木更津市		△	△	△						
		54	中台A遺跡	木更津市							△			
55		林遺跡	木更津市										□	
56		根岸小妻遺跡	木更津市			△	△							
57		山王台遺跡	木更津市			△	△							
58		丹過遺跡	木更津市								□			
59		庚申塚A・B遺跡	木更津市									■		
60		野焼A遺跡	木更津市						△			■		
61		野焼B遺跡	木更津市				△	■						
62		大山台遺跡	木更津市								□	□		
63		大畑台遺跡	木更津市										■	
64		東谷遺跡	木更津市								□	□		
65		西ノ入遺跡	木更津市								□			
66		郡条里遺跡	君津市							△				
67		畑沢遺跡	君津市							△	□			
68		常代遺跡	君津市			△	△	□	□				●	
69	鹿島台遺跡	君津市			△	△								
70	前三舟台遺跡	富津市				△								
71	川島遺跡	富津市							△	△	□	□		
安 房 地 域	72	仮家塚遺跡	南房総市									△		
	73	健田遺跡	南房総市										□	
	74	根方上ノ芝遺跡	鴨川市									□	■	

※ 「弥生終末期」や「古墳出現期」と報告される時期
△ 四隅陸橋形周溝墓
□ 一隅陸橋形周溝墓（複数形態有）
■ 全周形周溝墓（一部古墳と報告を含む）
● 円形周溝墓・遺構

(財) 君津郡市文化財センターによる地域的な統計的分析では、君津地域の四隅陸橋形は弥生中期の段階では方形周溝墓全体の76.9%を占めていたが、後期になると9.1%に急激に減少している。代わって多くなるのが一隅陸橋形で35%であるが、全周形も23.4%出現している⁽⁹⁾。この他、墓の大形化、少数化、住居群との混在化等も確認されている。

こうした背景には集落内で「被葬者の選別」が進行したと考えられる。

一方で、下総地域及び上総地域東北部では方形周溝墓は一斉に消滅していることに注目したい(第2表、第16図)。この間、死者に対する埋葬はどのように行ったのであろうか。このことについては後述する。



第16図 弥生後期方形周溝墓を含む主な遺跡
(下総及び上総東北部には検出されていない)



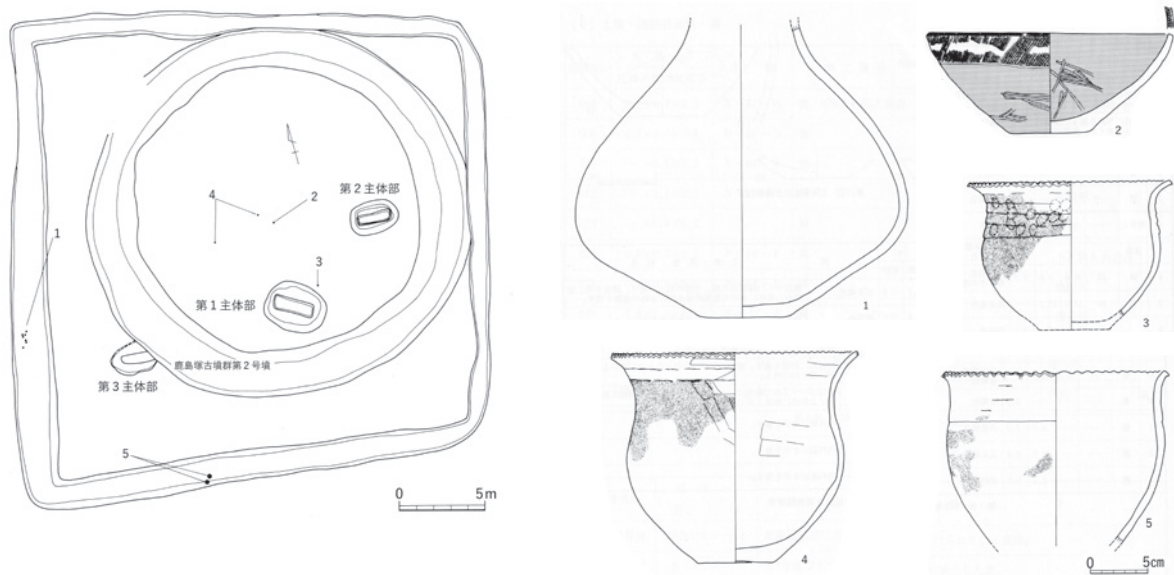
第17図 弥生中期から後期への方形周溝墓の変遷例
(市原市諏訪台遺跡(古墳群)報告書全体図(一部)を引用加工)

弥生後期に上総地域で「被葬者の選別」が、集落内もしくは地域的にどのような人物であったのか、重要な課題である。この時期、台地上では爆発的な住居の増加が生じ、拠点的な大集落も形成されてくる。それと反比例して方形周溝墓の数は大きく減少してくる。本稿で、この時期のすべての現象を紹介することはできないが①墓の大形化と主体部の急増②傑出した副葬品、についてのみ言及したい。

①墓の大形化と主体部の急増

第18図の庚申塚B遺跡例は東西方台部径(周溝内側径)で24m、第19図の野焼A遺跡は周溝外径で20.1mを測る。共に周辺地域には同時期の集落が広がっている(請西遺跡群)。特に、庚申塚B遺跡方形周溝墓は、

後時代に築かれた円墳がその墳丘を再利用していたほど盛土が残っていた可能性がある。また、主体部の増加は著しく、野焼A遺跡例とともに集落内で「選択された一族」が代々追葬を繰り返したと想定したい。



第18図 木更津市庚申塚B遺跡078号方形周溝墓（24m）

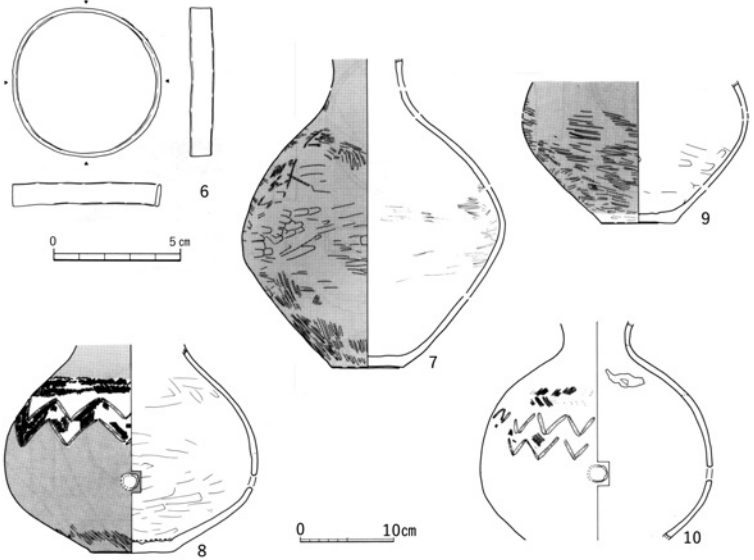
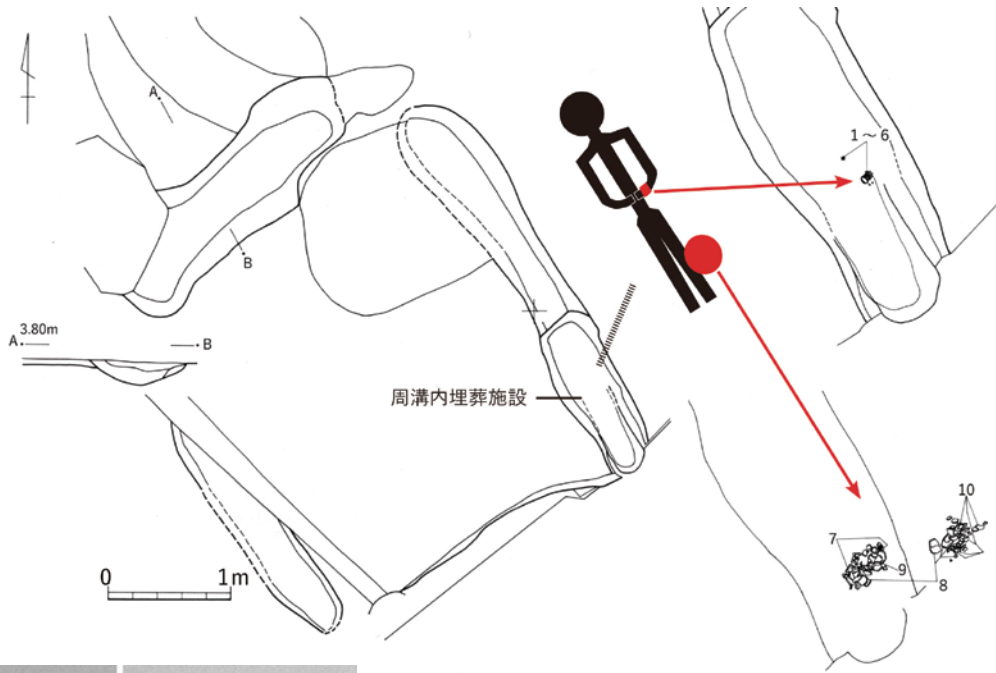


第19図 木更津市野焼A遺跡1号方形周溝墓（20.1m）

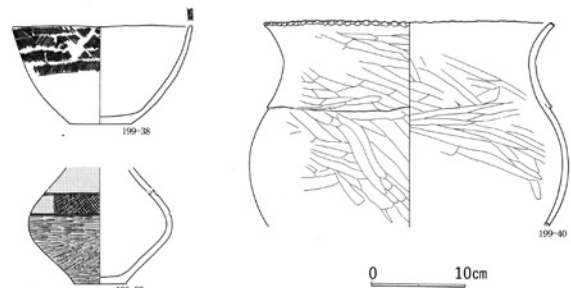
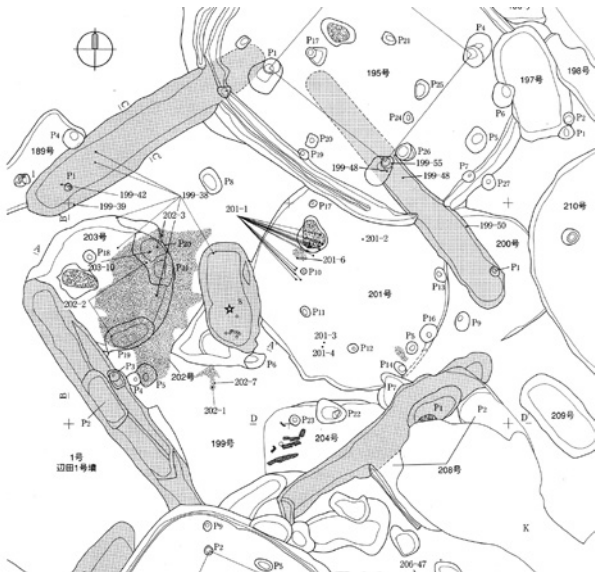
②傑出した副葬品 - 带状円環型銅釧と翡翠勾玉 -

带状円環型銅釧をまとめて5本以上も出土する方形周溝墓は県内でも複数存在する。木更津市高砂遺跡SZ22号では周溝内土壌に6本の銅釧が左手部分に配置され、左足付近には土器群がまとめて出土していた（第20図）。弥生後期初頭～中葉（前半期）の型式観がある。市原市御林跡遺跡199号では、中央主体部より人骨に伴って5本出土しており（第22図）、伴出した土器群は高砂遺跡よりやや新出の型式観がある。带状円環型銅釧は東日本に限定された分布があるが、長野県を中心とした波及が考えられ「生涯にわたり司祭者たる人物」が身に着けるもの⁽¹⁰⁾という想定もなされている。製造法は鋳造品であり、単体では上総地域で弥生時代後期から古墳時代前期にかけて、竪穴住居跡からも出土している⁽¹¹⁾。

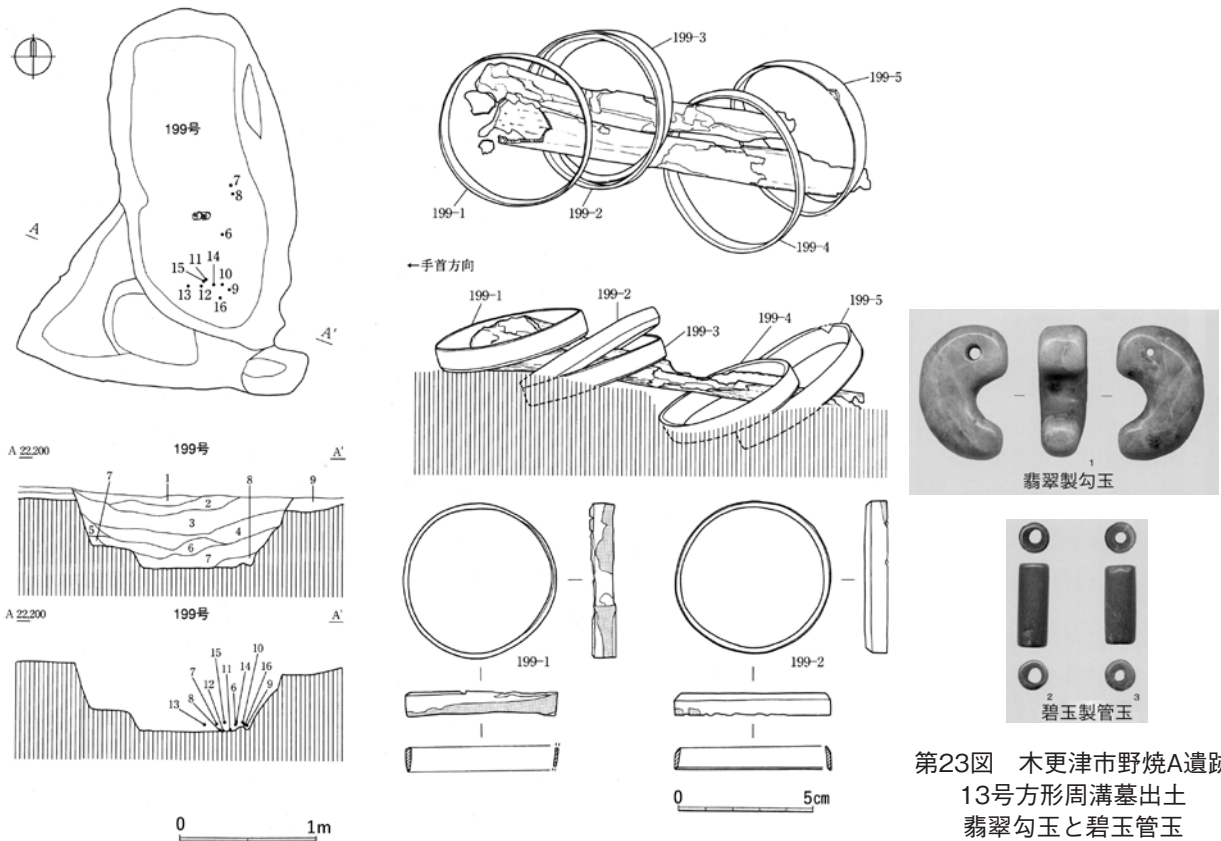
木更津市野焼A遺跡では方形周溝墓で玉類が大量に出土しており、その中に翡翠勾玉が見られている（第23図）。翡翠製品がが糸魚川流域からもたらされたとすれば、銅釧と合わせ、弥生時代後期には信越地方との交流が深まっていたことになろう。



第20図 銅釧出土例1
木更市高砂遺跡SZ22と出土遺物
(報告書遺構図を引用加工)



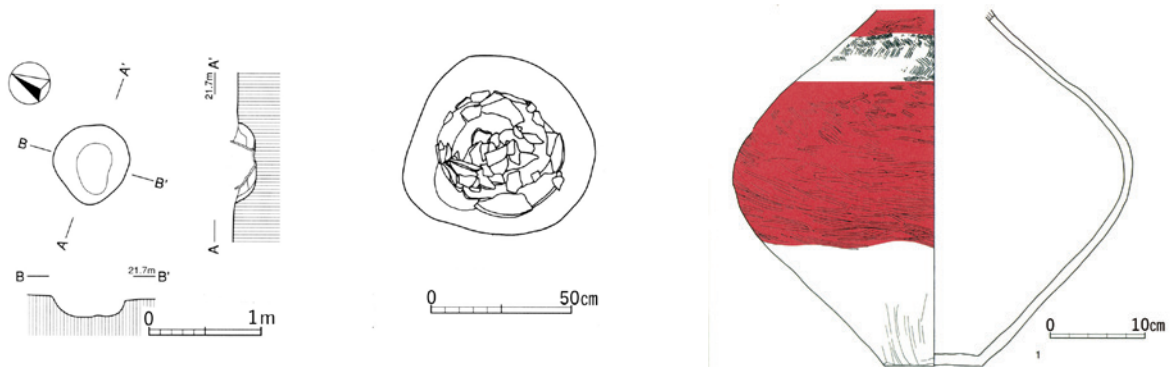
第21図 銅釧出土例2
市原市御林跡遺跡199号と出土土器(一部)



第22図 市原市御林遺跡199号出土銅釧（報告書遺構図を引用加工）

(2) 土壌墓から見た弥生時代後期墓制の地域差

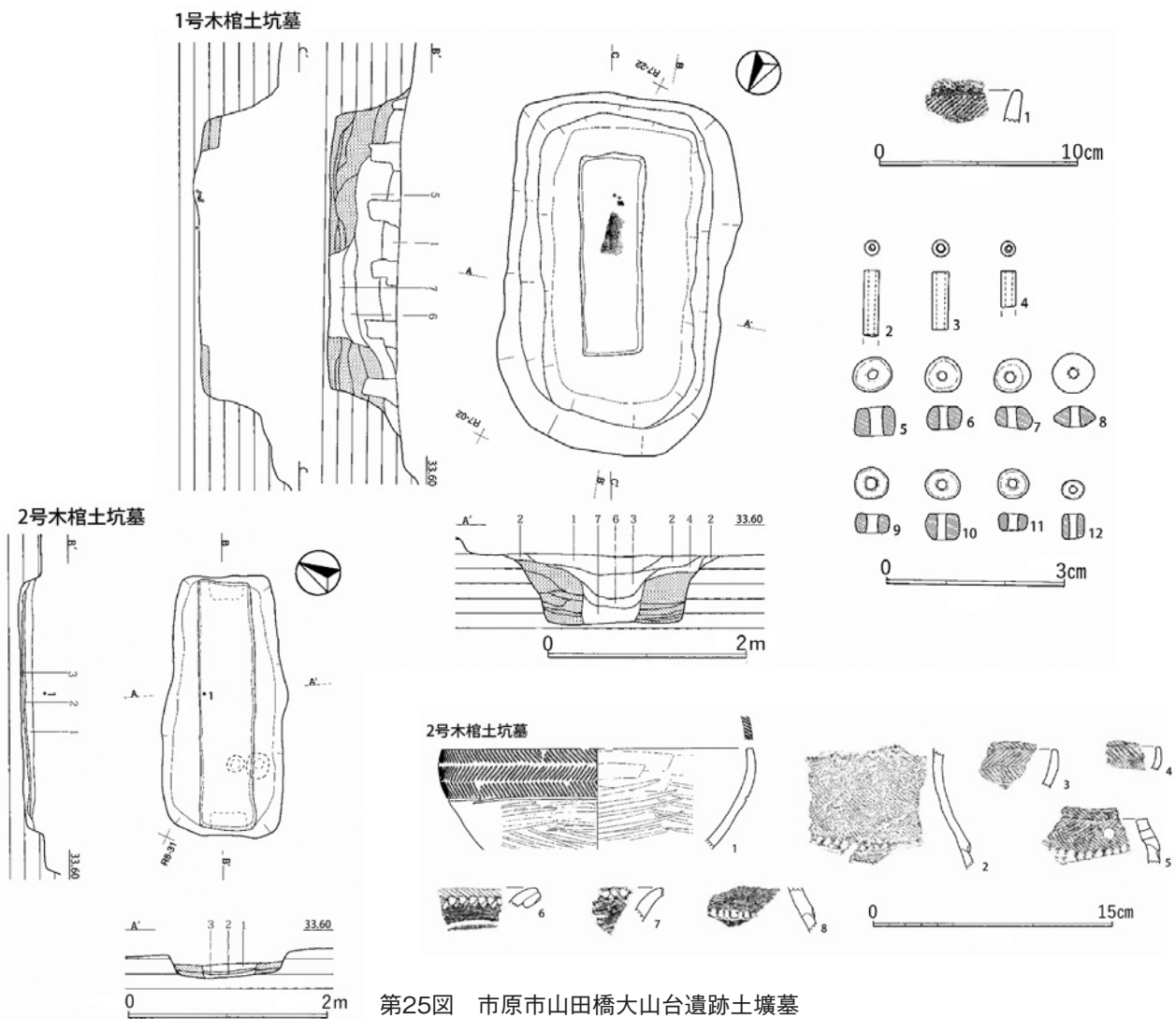
弥生後期になると先述した通り、下総地域では方形周溝墓が消滅している。そうすると死者を埋葬する方法は土器棺を含む土壌墓以外想定できない。八千代市栗谷遺跡は当地域で傑出した弥生後期の大規模集落であるが、周囲地域も含め、当該期の方形周溝墓は存在しない。第24図が小規模な土器棺であり、集落内に複数存在することから当時の墓制として定着していたのであろう。一方、出土土器に西上総地域の系譜（所謂南関東系）があることに注目したい。栗谷遺跡が西上総地域との交流があったにも関わらず、方形周溝墓という墓制を受け入れなかった背景は何であろうか。



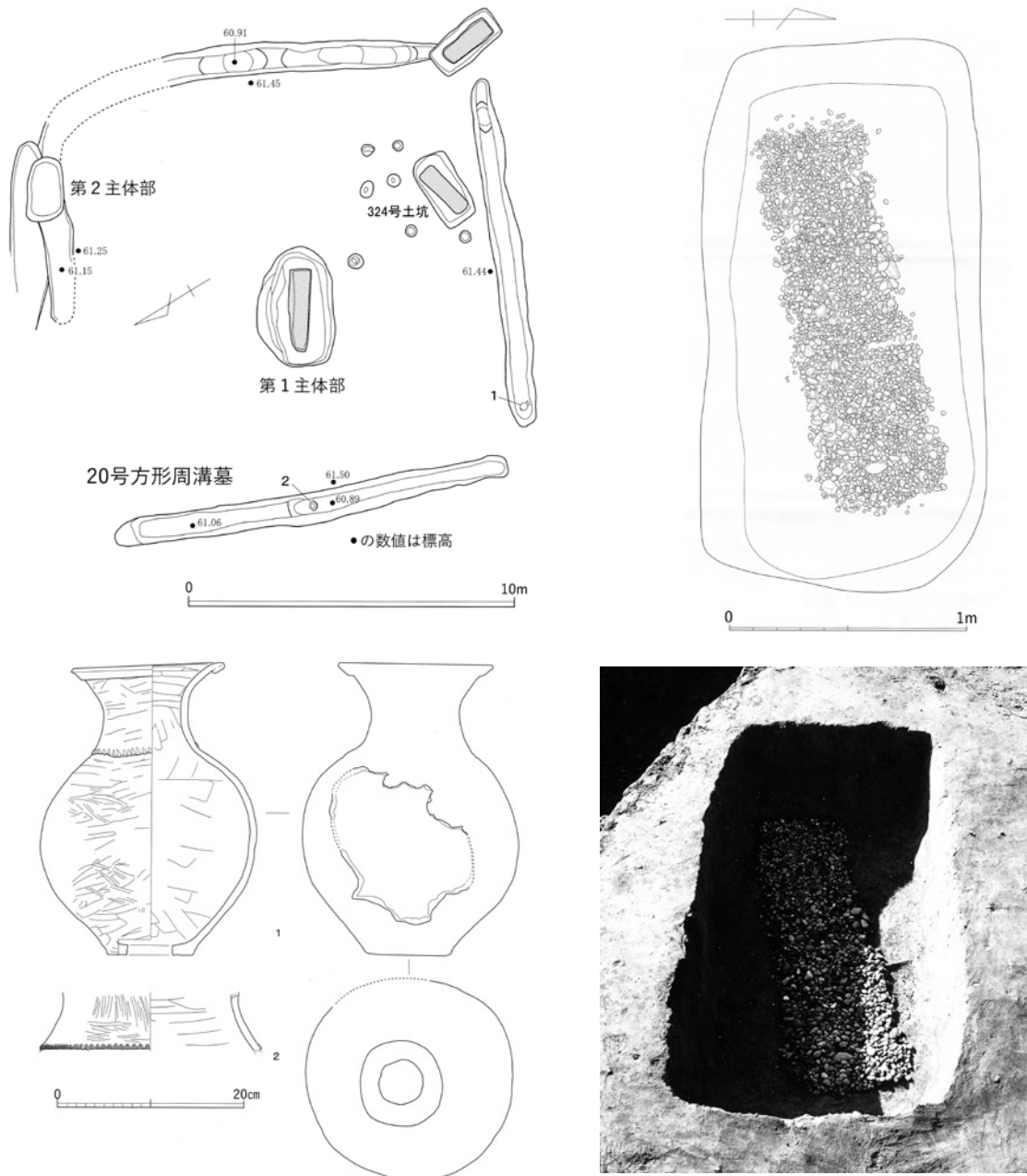
第24図 八千代市栗谷遺跡D085土壌墓（土器棺）

印旛沼周辺地域は、地理的にも陸地や当時の香取海を通じた北方との交流が強く、かつ印旛沼の東と西でもそれぞれで土器型式が微妙に異なるなど、複雑な小地域性を呈している。そうした中で栗谷遺跡が方形周溝墓を取り入れなかった背景には、北方との繋がりがより強いための在地的な葬法が続いていたという理由だけでなく、西上総地域とは異なる農耕文化があったと考えている。前述してきたように、西上総地域では台地上への大集落の形成とその背景には低地での水稲耕作の定着が想定される。木更津市芝野遺跡をはじめ、弥生後期の水田跡の検出が相次いだ一方、下総地域では今のところ全域で見ることができない。こうした格差が当時の墓制にも影響を及ぼしていたことは想定できよう。

一方、西上総地域では、土壙墓においても大きな変容に伴う被葬者の選別化が見られている。それは前期古墳の主体部にも共通する木棺を伴うもの＝木棺墓の出現である。



市原市山田橋大山台遺跡では木棺痕跡が明確に残り、玉類が副葬された土壙墓が検出されている（第25図）。また、木更津市東谷遺跡では、方形周溝墓の主体部に近接し、お互い並ぶような配置で礫床木棺墓が検出された（第26図）。礫床木棺墓は、長野県北部を中心に広がる栗林式土器文化圏の墓制であり、埼玉県熊谷市前中西遺跡でも検出され、詳細な分析が行われているが⁽¹²⁾、千葉県内では唯一の注目すべき発見例である。礫床木棺墓と20号方形周溝墓との関係は不明であるが、栗林式土器が長野県では弥生中期後半とされることから、方形周溝墓より前につくられていた可能性がある。



第26図 木更津市東谷遺跡 20号方形周溝墓と324号土壙墓

いずれにしても、木棺墓の被葬者が長野方面と関係の深い人物であったのだろう。信越方面との交流は、弥生後期の銅釧や翡翠勾玉の検出でも言及してきたが、栗林式分布圏との接触があったとすれば、弥生中期後半期まで遡ることになる。このように土壙墓においても、弥生後期では下総地域と西上総地域では大きな地域差（格差）が生じていたことになる。

ところで西上総地域の木棺墓の被葬者は、集落や地域でどのような立場であったのだろうか。礫床土壙墓は当地域で唯一例であるが、立地において特別に配慮されたような要素は見いだせない。集落内でも居住者と「近い人物」であったのだろう。また前述した方形周溝墓の銅釧を持つ被葬者も、周溝内に埋葬されている。すなわち被葬者は、集落内での長か、司祭者的な立場、あるいは信越方面の移住者であり、地域的な権力者などではなかったのである。この時期には未だ東海地方西部系や畿内系の土器は西上総地域でも見られていない。すなわち西方からの強い権力波及以前の個性的な「選ばれた人物」である。

5 弥生時代終末期（古墳時代出現期）の墓制

（1）方形周溝墓と古墳の区分基準

「弥生時代終末期」や「古墳時代出現期」という用語に異議は無いが、筆者はこの時期は古墳時代前期1期（初頃）としている⁽¹⁾。こうした解釈は意見が分かれるところであろう。「古墳時代」はその地域で初めて古墳が出現して以降の時代を指すが、「古墳」の規定が研究者によって個人差があるため混乱が生じるのである。方形周溝墓と古墳の区分が困難となっているのも根底には同様な視点の混乱がある。一方、両者の区別について小沢洋氏は明確な方針を示している⁽¹³⁾。氏は方形周溝墓と古墳（方墳）の区分については2つの立場があり、それは

①編年上のある時期を境に両者を区分する立場

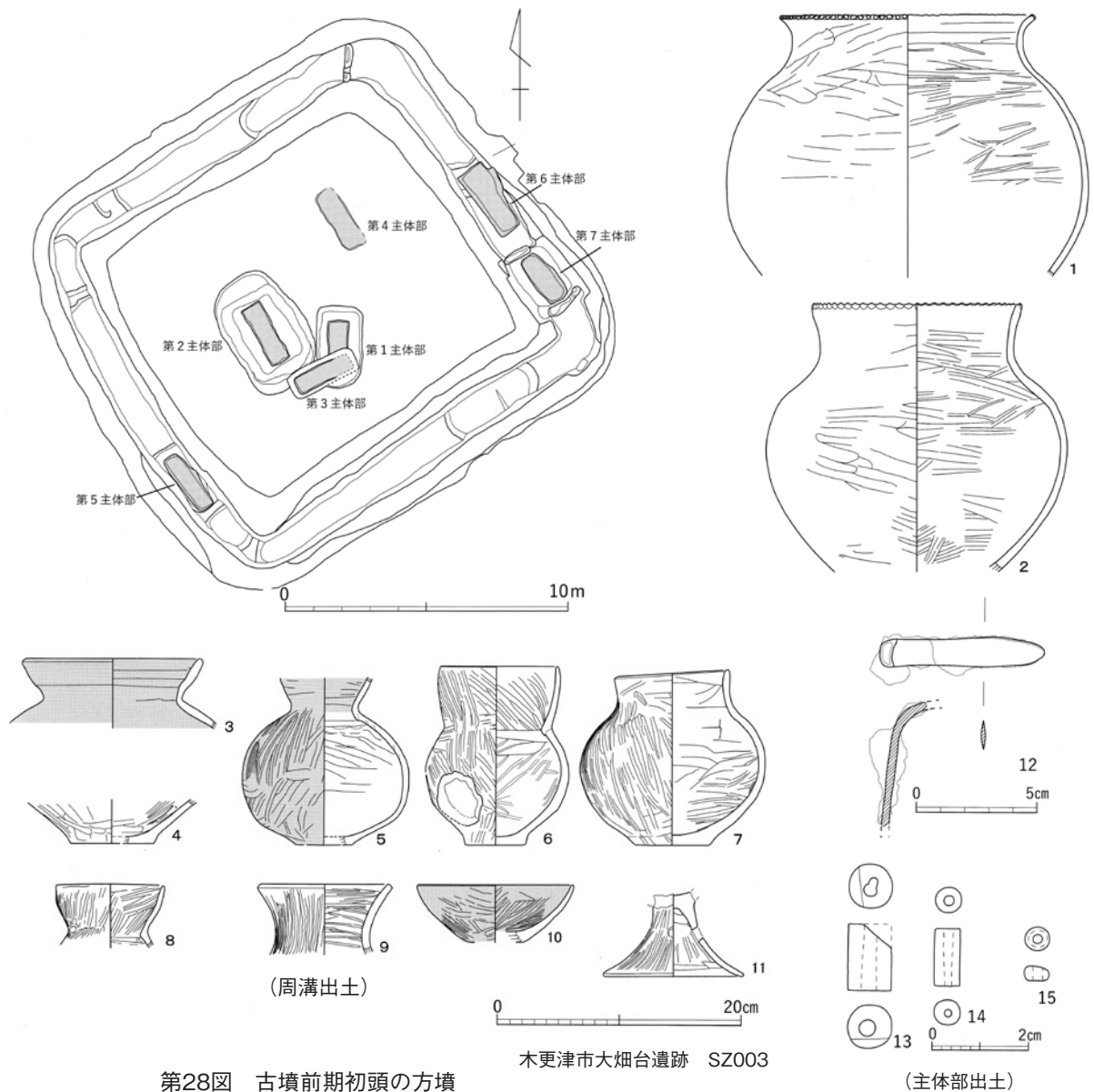
②明瞭な墳丘の存否等、一定の要素から両者を区分し、同時代における両者の併存を認める立場である。氏は①の立場をとっているが、筆者も同様である。このため「編年上のある時期」を明確化するため筆者は土器型式編年の物差し（以下、西上総編年）を小沢氏と設定し⁽¹⁾、西上総編年の「古墳前期1期」以降の土器を伴出する墓はすべて「古墳」とした。したがって「古墳時代の方形周溝墓」は存在しない。「方形周溝墓」は弥生時代の墓制、と規定したのである。

発掘経験者であれば理解できると思うが、方形に溝がまわる遺構を検出し、中央主体部から玉類、周溝から古式土師器が出土した場合、盛土が無ければ古墳時代前期の「方形周溝墓」とするであろう。しかし、もし盛土が確実にあった場合は「古墳」とするのではないか。また、主体部の有無や副葬品の内容等で方形周溝墓と古墳を区別する場合もある。いずれにしても、こうした区分基準には極めて大きな「個人差」がある。

西上総編年の古墳前期1期には弥生時代の墓制を引き継ぐ墓は確実に存在していた。それでも「古墳」と呼び、個人差が生じないようにすべきであると考えている。



第27図 弥生後期末葉の方形周溝墓



第28図 古墳前期初頭の方墳

第27、28図の遺構はどう扱うべきであろうか。2基とも盛土は確認されていない。結論を言えば第27図は出土土器が弥生時代後期末葉（西上総編年：弥生後期5期）ゆえに「方形周溝墓」である。第28図は出土土器が古墳時代前期初頭（西上総編年：古墳前期1期）ゆえに「方墳」である。反対意見も多いであろうが、土器型式上での編年的区分であり、墓の構造や内容は前提としていない。

(2) 下総地域での方墳の出現

第2表を見ると、弥生後期に方形周溝墓の空白地帯であった下総地域及び上総地域東北部に、弥生終末期（古墳出現期）以降に「方形周溝墓が復活」したかのような状況が確認される。各遺跡の発掘調査報告書では、これらを「方形周溝墓」と呼ぶ場合がほとんどであるが、筆者はこの時代は古墳時代としているため、すべて「方墳」とする。この地域では弥生後期には土壙墓（土器棺）による葬法が定着していたが、やがて、上総地域と歩調を合わせる状況で方墳が出現する。多少の時間差はあるものの、汎半島的な出現の背景には、畿内及び東海地方西部からの強力な影響を想定せざるを得ない。第2表に見るよう、柏市石揚遺跡、八千代市栗谷遺跡、千葉市星久喜遺跡などに続き、佐倉市大崎台遺跡や臼井南遺跡、八千代市萱田遺跡群などで次々と方墳が築造されていく。

(3) 集落との近接と隔絶

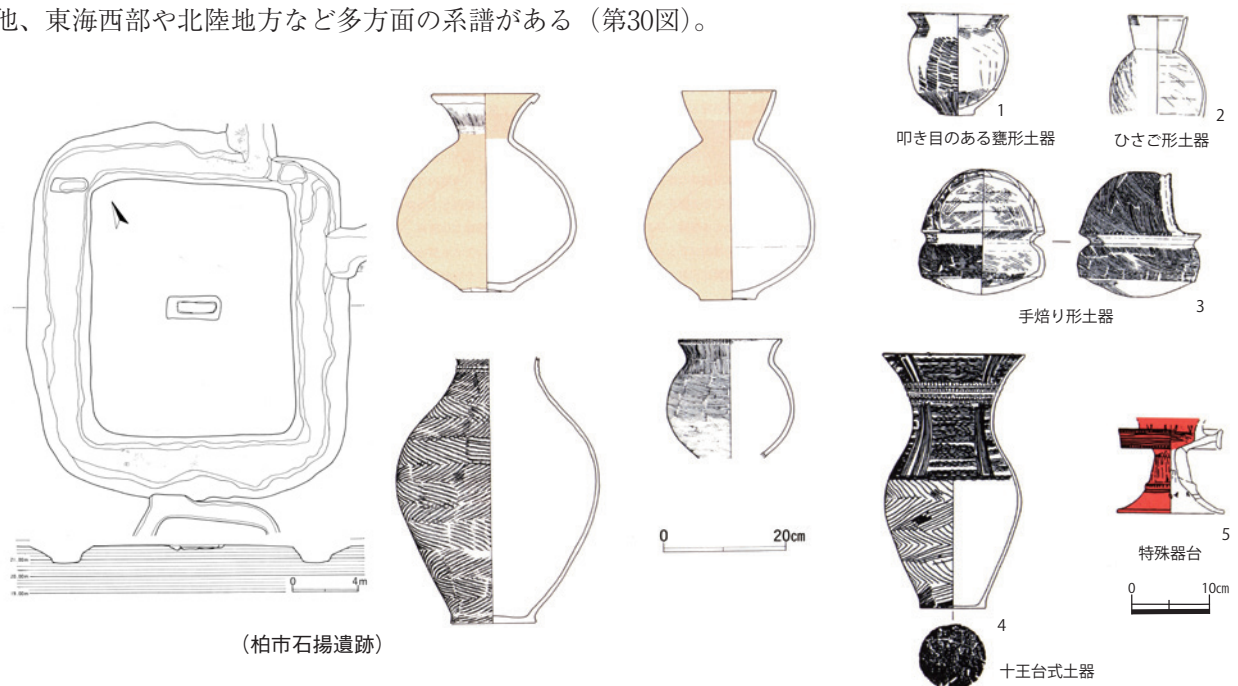
初期の方墳は集落から近接している場合もあるが、隔絶していく傾向が現れている。紙面の都合ですべてを図示できないが、前述した大畑台遺跡のSZ007（方形周溝墓）とSZ003（方墳）の位置や石揚遺跡の方墳群の立地は第29図のとおりである。



第29図 初期の方墳と立地

(4) 外来形土器と特異な副葬品

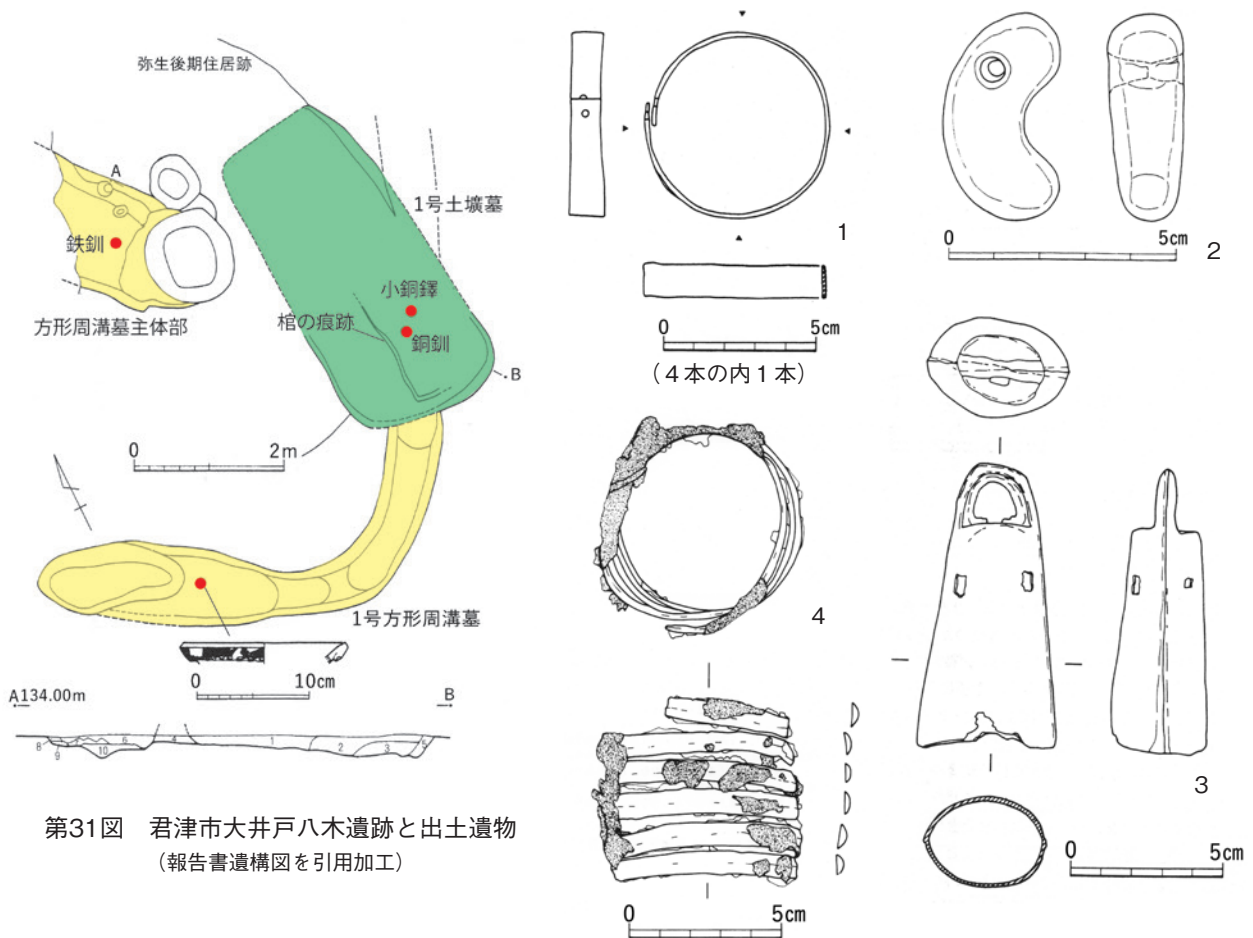
石揚遺跡では利根川以北の系譜を持つ土器と、上総地域に共通する土器が周溝から出土している。星久喜遺跡では畿内もしくは東海西部系土器が周溝より出土し、大崎台遺跡周溝では畿内庄内式のタタキ甕の他、東海西部や北陸地方など多方面の系譜がある（第30図）。



第30図 初期の方墳と外来形土器

(佐倉市大崎台遺跡) 柿沼修平2003

君津市大井戸八木遺跡では、土壙墓から帯状円環型銅釧（1）4本、翡翠勾玉（2）に加え小銅鐸（3）が出土した。また、方形周溝墓からは鉄釧（螺旋状）（4）が出土した。銅釧は弥生後期に木更津市高砂遺跡の方形周溝墓にも見られ、長野県一带を中心とした交流の中で持ち込まれたものと考えられるが、小銅鐸は東海地方での銅鐸生産と関係が指摘される。上総地域で出土が集中しており、市原市の川焼台遺跡・天神台遺跡・草刈遺跡、袖ヶ浦市の水神下遺跡・文脇遺跡、木更津市の中越遺跡などである。川焼台遺跡では弥生時代後期住居跡に出土し、草刈遺跡では古墳前期前半の方墳に副葬されている。さらに中越遺跡では古墳前期後葉（西上総編年）の竪穴住居跡から出土しており、非常に長い期間所有、伝世された極めて貴重な祭器であったと言える。いずれにしても弥生後期に見られた地域交流とは異なり、弥生終末期（古墳出現期）には、東海地方を含む西方からの強い勢力が新たに波及していたのである。



第31図 君津市大井戸八木遺跡と出土遺物
(報告書遺構図を引用加工)

6 まとめ

房総地方の弥生時代墓制の変遷を語るには、2つの大きな地域性が前提となる。下総地域（上総地域北東部を含む）と上総地域（安房地域を含む）である。弥生中期前葉から中葉では再葬墓が汎地域的に定着し、その後西上総地域で初めて方形周溝墓が出現したが、当初は再葬墓を伝統を残した周溝内埋葬が見られた。下総地域では伝統的な土器棺が定着していたが、やや遅れて方形周溝墓が伝わり、両地域で四隅陸橋形で盛土と中央主体部を有する集団墓制が定着した。西上総地域では弥生中期末葉に周溝内に親子を埋葬（追葬）した可能性もあり、集団墓制内での多様化は許されていた。

やがて弥生時代後期になると、上総地域では台地上での大集落の形成と共に方形周溝墓は多様化し、構

造的な変容、選別化等が進んだ。20mを超える大形方形周溝墓に集落内の有力者が埋葬・追葬されたり、信越地方と繋がりある司祭者は、住民と近い立場ではあるが逝去に際しては特別な埋葬が施された。

こうした背景には水稻耕作を基調とした農耕文化の発展に伴う集落の経済基盤の安定がある。一方で集落内に経済格差も発生するが、信越地方の墓制や銅釧、翡翠勾玉など貴重品の所有など、許容範囲の広い個性的な集落形成が行われていたと言えよう。一方、下総地域では方形周溝墓から土壙墓（土器棺）への変換が生じた。この背景には利根川以北地域との一体化が想定されるが、上総地域との断絶とは言い切れないことは、印旛沼西部地域などからは上総系譜の土器が多く出土している事実にある。

やがて、弥生時代終末期（古墳時代出現期）には東海地方西部や畿内地方からの影響力の強化を背景に、上総地方から下総地域、さらには利根川以北まで方形周溝墓＝方墳が伝わっていく。そうした中で西上総地域に纏向形の前方後円墳（神門古墳群）や前方後方墳（高部古墳群）が出現し、古墳時代が始まるのである。

7 おわりに

弥生時代の絶対年代観について、国立歴史民俗博物館（歴博）は炭素14年代を基に発表され⁽¹⁴⁾、筆者は考古学的年代観との比較検討を行った⁽¹⁾。詳細は省略するが、房総地方における弥生時代中期の始まりは最も古いデータ紀元前430年、他のデータと合わせると概ね紀元前400年前後で合意できる。一方、弥生後期から古墳前期の年代観にはバラツキがあり明確でないが、現状では西暦250年頃を弥生時代の終末と捉えている。その間、実に650年にも及んでいる。方形周溝墓や土壙墓（土器棺や木棺墓を含む）という墓制が、変容しながらもそれだけ長く続いていたことに、改めて驚きを感じる。

（公財）千葉県教育振興財団も50年という長い期間に渡り、貴重な歴史資料を発掘してきた。本稿はそれらの一部をそのまま紹介したに過ぎず、特に目新しいことを語っているわけではない。紙面の関係もあり、重要な視点である環濠集落や円形周溝墓、副葬品の分析などについて言及できなかったことをご容赦願いたい。

〈註・引用文献〉

- (1) 編年の名称については、小沢洋 加藤修司 2024『西上総における弥生時代～古墳時代前期の土器編年』「木更津市史研究 第7号」に基づいている。弥生中期を前半、後半と2分していないため、従来の型式観では宮ノ台式は「中期中葉～後葉」にまたがっている。
- (2) 渡辺修一 2005「土器の変遷－弥生土器－」『千葉県の歴史 資料編 考古4』千葉県
- (3) 石川日出志 2009「弥生時代壺再葬墓の終焉」『考古学集刊 第5号』明治大学文学部考古学研究室
- (4) 甲斐博幸 1996『常代遺跡』（財）君津郡市文化財センター
- (5) 加藤修司 2006『東関東自動車道（木更津市・富津線）埋蔵文化財調査報告書5－君津市鹿島台遺跡（A区・D区）－』（財）千葉県教育振興財団
- (6) 林 純子 2008『弥生時代中期後半における方形周溝墓と土器棺墓の様相』『法政考古学 第34集』法政考古学会
- (7) 渋谷興平・青山博 1987『寺崎遺跡群発掘調査報告書』佐倉市寺崎遺跡調査会
- (8) 土井翔平 2019「弥生・古墳時代の周溝内埋葬」『駿台史学 第165号』駿台史学会
- (9) 小林理恵 1996「方形周溝墓・方墳の周溝形態」『研究紀要Ⅶ』（財）君津郡市文化財センター
- (10) 野澤誠一 2002「銅釧・鉄釧から見た東日本の弥生社会」長野県立歴史館研究紀要8
- (11) 小高幸男 1989「銅製指輪・腕輪について」『小浜遺跡群Ⅱ マミヤク遺跡』（財）君津郡市文化財センター

- (12) 松本 哲 2013『前中西遺跡 熊谷市埋蔵文化財調査報告書16』埼玉県熊谷市教育委員会
- (13) 小沢 洋 1996「方形周溝墓・方墳の画期」『研究紀要Ⅶ』（財）君津郡市文化財センター
- (14) 国立歴史民俗博物館 2007『弥生はいつから - 年代研究の最前線 -』国立歴史民俗博物館

〈参考文献〉

(本文中で引用した発掘調査報告書のみ 執筆者五十音順)

- 浅野雅則 2000『山王台遺跡・内屋敷遺跡』（財）君津郡市文化財センター
- 荒井世志紀 2006『志摩城跡』多古町教育委員会
- 安藤道由 2018『井尻遺跡発掘調査報告書Ⅱ』木更津市教育委員会
- 稲葉昭智 1995『大竹遺跡群発掘調査報告書Ⅳ 向神納里遺跡他』（財）君津郡市文化財センター
- 太田文雄 1994『沼南町 石揚遺跡 - 手賀の丘少年自然の家建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 -』
(財)千葉県文化財センター
- 大村 直 2004『市原市山田橋大山台遺跡』（財）市原市市文化財センター
- 小高幸男 1999『高砂遺跡Ⅱ』（財）君津郡市文化財センター
- 柿沼修平 2003「六崎大崎台遺跡」『千葉県の歴史 資料編 考古2』千葉県
- 加納 実 1996『市原市武士遺跡1 - 福増浄水場埋蔵文化財調査報告書 -』(財)千葉県文化財センター
- 北見一広 2015『市原市諏訪台古墳群・天神台遺跡Ⅱ』市原市教育委員会
- 木對和紀 2004『辺田古墳群・御林跡遺跡』（財）市原市文化財センター
- 栗原敦司ほか 2000『南羽鳥遺跡群Ⅴ』（財）印旛郡市文化財センター
- 齋藤礼司郎 2009『笹子遺跡群発掘調査報告書Ⅱ - 中台A遺跡・中台B遺跡 -』木更津市教育委員会
- 齋藤礼司郎 2010『大畑台遺跡群発掘調査報告書Ⅹ - 大畑台遺跡(6) -』木更津市教育委員会
- 酒巻忠史・山形美智子 1995『請西遺跡群発掘調査報告書Ⅵ - 野焼A遺跡 -』木更津市教育委員会
- 酒巻忠史 2009『中尾遺跡群発掘調査報告書Ⅷ - 東谷遺跡Ⅴ -』木更津市教育委員会
- 白井久美子ほか 1980~97『千原台ニュータウンⅠ~Ⅶ』（財）千葉県文化財センター
- 田形孝一ほか 1991『大竹遺跡群発掘調査報告書Ⅰ 笹田遺跡他』（財）君津郡市文化財センター
- 當眞紀子 2010『大井戸八木遺跡・大井戸八木古墳群』君津市教育委員会
- 戸倉茂行 1990『郡条里遺跡発掘調査報告書』（財）君津郡市文化財センター
- 西川博孝ほか 2011『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書12 - 根岸小妻遺跡他 -』（公財）千葉県教育振興財団
- 浜崎雅仁 1996『高砂遺跡』（財）君津郡市文化財センター
- 箕島正広 1993『請西遺跡群発掘調査報告書Ⅳ - 庚申塚A遺跡・庚申塚B遺跡他 -』木更津市教育委員会
- 宮澤久史 2004『栗谷遺跡 役山東遺跡 雷南遺跡 雷遺跡(仮称)八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』八千代市遺跡調査会
- 矢戸三男ほか 1975『阿玉台北遺跡』千葉県都市公社